

ラック!
Luck!

good!は2001年に活動を開始した、若者のきっかけづくりを応援するNPO法人です。

元気な学生はもちろん不登校・ひきこもり経験者を含む全ての若者を対象にアジアや日本各地で現地の人々と汗を流すワークキャンプを続けています。

中学生から社会人まで様々な経歴を持った延べ3,800人を超える若者が参加。事務所はたくさんの若者が集まるフリースペースとして開放しており、自立を目指す若者たちの共同生活寮も併設されています。

24年目を迎えました！
4年ぶりにスリランカキャンプが復活
キャンプ開催が200回を突破！
新しいスタッフやメンバーも増えて
やっと賑やかなグッドの日常が戻ってきた
そんな2023年の報告です！





スリランカキャンプ、4年ぶりに復活！

春は23名、夏には25名が参加。
 高校生、大学生、社会人、フリーターなど年齢も経歴もさまざま。
 ホームステイをしながら、村人が熱望する**道路建設**を行いました。
 夏キャンプはグッドが実施した**200回目**の記念キャンプに！
 大自然と村人たちの優しさが**心**にしみる、14日間の報告です。



空港からバスに揺られて約4時間。

北中部州のポロンナルワで活動をしました。2月は大きな湖のあるカンダカドゥワ村。9月はジャングル地帯と草原地帯が混在するポーアッタ村を訪れました。どちらもジャングルに囲まれた美しい村で、みんなの大好きな故郷になりました！



voice 01 炎天下のバケツリレー

Work ワーク

ワークはどちらも道路建設。
 雨季になるとぬかるんで、通学バスや車が通れなくなる道をコンクリートで舗装しました。村人たちと協力して、**春**はコンクリートをシャベルで捏ねて30m、**夏**は機械の力も借りて100mの道を完成させました。



灼熱の村でのワークは、本当に大変だった。普段だったら

つらくてやりたくないと思ってしまいそうだけど、**仲間**と声を掛け合い、**歌いながら**、バケツリレーでセメントを運んだのは、とても楽しかった。少しずつ伸びていく道を眺めるのが楽しく、出来上がった時の**達成感**は素晴らしいものだった。完成した時の村人たちの**笑顔**は忘れられない。自分たちがこの村の**役に立てた**のを実感できて嬉しかった。





voice

02

言葉の壁を越えた

Communication コミュニケーション

スリランカは、シンハラ語という言語を使う。村では、英語すらほとんど通じなかった。ジャスチャーを使ったりお互いの言葉を教えあったりしているうちに**気持ちが通う**瞬間が増えてきて、本当に嬉しかった。言葉なんかわからなくても、一緒に生活して、**心の底から笑いあえた**ことは、自分の中で**大きな自信**になった。



初めは不安が大きかったけど、集合場所の空港で声をかけてくれた人がいてすごく**安心**したのを覚えている。自分にとって大きな成果は、かけがえのない**大切な仲間**と出会えたことだ。現地に着いて初めてのミーティングでは、自己紹介と共にみんなの気持ちを聞くことができた。自分には無い経験をしてきた人、同じような悩みを抱えている人もいた。正直、みんなの言葉に驚いたけど、ここは気持ちを**素直に話していい**場所なんだと認識することができた。自分の中に抱えてきた思いを出会ったばかりの人たちに話せたこと、みんなが**真剣に聞いてくれた**ことが何よりも嬉しかった。

voice

03

大切な仲間との出会い

Best Friends

仲間



voice

04

楽しむことの大切さ

Challenge

挑戦

村の生活は、日本と全く違った。毎朝クジャクの声で目を覚ましトイレには紙がないし**ご飯は右手**で食べた。私にとってお風呂は一番の**挑戦**だった。ステイ先で川で水浴びをすることも、**湖に飛び込んで**体を洗うのも今までやったことがない。でも、みんなと「これを乗り越えられたらすごいよね」「こんな経験日本じゃできないよね」とポジティブな言葉を掛け合っていたら、いつの間にかどんなことでも楽しめていることに気がついた。自分には**絶対できない**と思っていたことがた**くさんできた**2週間だった。



ホームステイでは、**家族の優しさ**を数えきれないほど感じた。アンマ（お母さん）がご飯の食べ方や水浴びの仕方を丁寧に教えてくれた。3人の妹たちは私よりも年下なのに、朝起きた瞬間から寝る直前までずっとそばにいて、困った時は助けてくれた。浴衣を着せてあげた時には笑顔で何度も写真を撮って喜んでくれて、お返しに大事なサリー（民族衣装）を着せてくれた。タータ（お父さん）は、一生懸命私のことを知ろうとして話しかけてくれた。アンマのご飯は本当に美味しく**沢山の愛**を感じた。たった10日間共に過ごしたただけなのに、本物の家族のような**大切な存在**になった。



voice

05

もうひとつの家族

Homestay

ホームステイ



村を離れる時、アンマが涙を流してくれたこと、妹たちが抱きしめてくれたことは**一生忘れない**。



25.00

スリランカの記念切手に！



設立の初年度にスタートしたスリランカキャンプ。災害やコロナの影響で中断した時期もありましたが、約30の村で井戸掘りや道路建設を行い、700名近い若者が「もうひとつの家族」と出会いました。そして、そんな長年のスリランカでの功績が認められ、2023年、なんと代表磯田の記念切手（25ルピー）が発行されました。高校の家庭科の教科書掲載に次ぐ、びっくりな出来事でした！（´Д`）ｽｺｰｲ！



モンゴル MONGOLIA

WORK CAMP

199th 2023.8.5-17



コロナによる規制が緩和され、初海外の大学生や高校生が数多く参加。総勢22名のメンバーたちは、首都ウランバートルから寝台列車に揺られ、車窓に広がる大草原や星空を眺めながら、北部エルデネット市に向かいました。



▲高校生7名が参加



Work



公園と井戸小屋の修繕



柵が壊れてガラス片も散乱する公園は、子どもたちが安心して遊べない状態。まずは草刈りとゴミ拾い。柵を補修しペンキも塗りました。砂場に新しい砂を入れ、新しいバスケットゴールを設置。作業が終わるとすぐにたくさんの子どもたちが遊びに来ました。さらに井戸の修繕も実施。活動した地域の家庭には水道がなく、子どもが毎日井戸に水汲みに来ていました。まずは井戸を囲う小屋の土台をセメントで修繕。かわいいイラストを描き、ライトを設置しました。老朽化した小屋が綺麗に生まれ変わりました。



▲みんなで作ったバスケットゴール

遊牧民生活



ゲルステイ&民族衣装



移動式住居“ゲル”の組み立てに挑戦！必要なのは動物の皮やフェルト、木の骨組みとロープだけ。道具も使わず、あっという間に30人が寝られるゲルが完成！さらに民族衣装のデールを着て写真撮影！厳しい環境を生き抜いてきた遊牧民の暮らしを肌で感じることができました。



壮大な自然と異文化を体験する13日間

高校生/大学生の声

満天の星を見上げて

地球の丸さを感じられる星空には感動した。ペルセウス流星群が来ていて、上にも横にも広がる空を見上げると流れ星がいくつも見えた。モンゴル人と一緒に草原で寝ころび、星が流れる度に大声を出して喜んだ。星たちの一つ一つがスローモーションのようにゆっくり流れたように感じられたけど、願いごとはできなかった。たくさんの星座や天の川をつくる無数の星にも本当に感動した。草原の夜は気温が0℃まで下がり、とても寒かったけど、飽きることなく何時間でも眺めていられた。



「いただきます」の意味を知る

初めて屠殺を見た。モンゴルでは動物の血で大地を汚してはいけない。羊の屠殺は腹に10cmほどの切り込みを入れた後に手を入れて心臓の血管を指で切断し、胸に血をためる方法をとる。だんだんと弱っていき、力のない声でうめく羊の姿は心に突き刺さったが、命をいただくことの本当の姿を見たような気がした。屠殺の前に遊牧民から「泣かないでください」と言われたことが印象的だった。日本人には、羊が目の前で解体されていく光景は衝撃的で涙が出るのは仕方のないことのような気がしていた。しかし、モンゴル人は生きるために日常的に動物をさばいていて、その所作は美しくも感じられた。解体された羊の骨を持って走り回って遊ぶ子どもの姿もあった。「かわいそう」ではなく、命に感謝をして大切にいただきたいと思った。



強く、優しい、モンゴル人

モンゴル人はとにかくパワフルだ。一日中動いて疲れた後も、誰かが歌い出すとみんなで歌い、相手が大人でも子どもでも本気で遊び、音楽は爆音で夜でも踊りまくる。でも、いつも日本人のことを気にかけてくれている。草原で馬に乗ったときも、何度も私の方を振り返って落ちないか確認しながら進んでくれた。その背中からモンゴル人の優しさと、がっちり馬にまたがる芯の強さが感じられた。陽気で優しくてあたたかい、こんな人達が同じ地球にいるのだと思うと、すごく不思議な気持ちになった。



草原を眺めて

衝撃だったのはやはり草原である。生きてきた中で間違いなく一番美しい景色だった。広大な平原は、どこまでも広がる緑の海のようなだった。群れをなす馬と羊、そして青空の広がる風景は、どこかの絵画の世界に迷い込んだようで、うまく言葉で表せない。一人でなにも考えずにただ遠くを見つめる時間は贅沢で幸せなひと時だった。

あの景色を自分の目で見られて本当によかった。



国内 キャンプ



全国5カ所の活動先で9回実施。
計126名が参加しました！
本格的な農業体験や
動物とたっぷり触れ合う
牧場キャンプ、社会人でも
気軽に参加できる週末キャンプも！
自然の中で体を動かし、
新しい仲間にも出会えちゃう！



197th 6/2-4 13名
203rd 10/7-9 23名

都市から移住した家族が中心となって
開村した自給型協同農園。
約30世帯の明るくて気さくな村民
たちとの交流は、多様な生き方に
触れる機会になっています。

山梨 のらんぼ村

北杜市

2泊3日の連休開催だったので
学生も社会人も気軽に参加！
6月は田植え、10月は稲刈り。
日常を離れて思い切り体を動かし、
大声で笑って、リフレッシュ！



195th 5/3-7 8名

広大な田んぼの真ん中にある
若者の自立支援寮。
寮生たちは、学校やバイトに通い
ながら、米作りをしています。

富山 はぐれ雲

富山市

新緑の美しいGW、広い田んぼを
風が気持ちよく吹き抜ける。寮生た
ちと一緒に苗出しや田植え、
草刈りを行いました。くたくたにな
るまで働いた後のツヤツヤの
お米は絶品！



198th 6/21-25 9名
202nd 10/4-8 8名

長野 信州共働学舎



小谷村



ハンディを抱えた人達が、
有機・無農薬で米や野菜を育
て、牛・山羊・鶏と一緒に、
穏やかに暮らしています。人と触
れ合い、自然に寄り添う
5日間です。



収穫した稲の脱穀と、収穫後の田んぼに堆肥を
撒くのがメインの作業。早朝から牛舎で牛と
ヤギの餌やりと糞掃除のお手伝いもした。
牛舎で集めた牛の糞は、堆肥置き場に運んで、
3年かけて発酵させて堆肥にする。それを田んぼ
に撒くと、翌年に栄養たっぷりの美味しいお米
が収穫できる。収穫した稲を脱穀して、粃米
(モチゴメ)を取った後に残る稲藁(ワラ)を
餌として牛たちに与える。

その無駄のない完璧な自然の サイクルを知って、感動した。

脱穀や堆肥を撒くのは本当に大変だったから、
お米は一粒も残さずに感謝して食べなきゃいけ
ないと思った。(東京から参加/大学3年生)



193rd 3/17-21 21名
 196th 5/3-7 10名
 201st 8/23-27 17名

広島 ブエンカミーノ



生きづらさを抱える若者を対象に、
 農作業や共同生活を通して
 自立支援活動をしています。
**季節の野菜の収穫、
 袋詰め、出荷までを体験！**



仕事の忙しさから心に余裕がなくなりかけた時、ふと、学生の頃を思い出して、逃げるように広島キャンプに申し込んだ。久しぶりに参加したキャンプは、**想像よりもずっと楽しくて**、心の動く瞬間がたくさんあった。畑作業は、新鮮な体験に溢れていた。柔らかい土の上に乗って、瑞々しいキャベツやブロッコリーを収穫したり、泥で手を汚して苗を植えたり。日常では味わうことのない感覚に**心が落ち着いていくのが分かった**。

普段の仕事は決められた時間の中で、ゴールとそこまでの道筋が決まっている。求められること以外は“余計なこと”で、遊びなんかない。畑では、土の温もりを感じたり、ぴよこぴよこ跳ねるカエルを眺めたり、遠くの山がブロッコリーに見えたり、“余計なこと”が溢れていた。それは今の私にとって、**とても大切なこと**なんだと思った。

(福岡から参加/社会人2年目)



194th 3/25-31 20名

静岡 デンマーク牧場



牧場の一日は、朝日が昇り始める頃、牛・馬・羊たちのお世話から始まる。鼻息を感じるくらいの距離で、餌をやる。最初は、その大きさにびっくりしたけど、日を追うごとに可愛く思えてきた。羊の柔らかい

モフモフした毛を撫でるのが楽しみ

だった。みんなとは**同じ屋根の下**、決して広いとは言えないお家で過ごした。ご飯の時も眠る時も、ぎゅうぎゅう肩を寄せ合った。ほんとは少し不便な生活だったけど、ありのままの自分が受け入れられているような気がして、**大きな家族みたいで楽しかった**。動物とも新しい仲間とも、ぎゅっと距離が縮まった1週間だった。

(埼玉から参加/大学4年生)



児童養護施設や自立援助ホームなどの福祉施設が併設され、牛・馬・羊と共に人も育む取り組みを行う牧場。動物とたくさん触れ合えて、**新鮮な牛乳**が本当においしい！



キャンプ参加者の声

アヤカ (21歳) 大学で福祉を学ぶ、現在就活中の3年生です。

初参加は、山梨の農業体験ワークキャンプ。1年半前、大学2年生の夏でした。最初の頃とは全然ちがう表情で笑うようになったアヤカに、キャンプに参加する前の自分や、初めて参加してからどんな変化があったのかを振り返ってもらいました。



「みんなはできるかもしれないけど、私には無理だから…」

グッドと関わり始めるまでの20年間、私はずっとそう思いながら生きてきた。

中学生から大学生になるまで、私はとにかく勉強熱心だった。周りの先生やクラスメイトから「アヤカは真面目だね」「えらいね」と言われることも多かったけれど、そんな言葉、本当は少しもうれしくなかった。勉強を頑張っていたのは、成績が悪い自分に価値がないと思っていたから。「できる子でないと自分の居場所がなくなる…」そんな不安から、必死に勉強していたのだ。私からすると、むしろ、部活や習い事など、やりたいことをやっている友達の方がよっぽど輝いて見えたとし、その子たちをうらやましく思っていた。それでも、「あの子たちは恵まれているのだ。私はこういう環境に生まれたのだから仕方がない」と、あきらめにも似た気持ちで、また机に向かうのだった。



▲初キャンプの様子

そんな私は、ずっと自分に自信が持てなかった。大学生になっても、自分の良いところが一向に見つからない。こんな自分で大丈夫なのだろうか…。そんな危機感を持ち始めていた頃に、たまたま見つけたのがグッドのワークキャンプだった。初めて会報誌「Luck!」を読んだとき、飾らずありのままの姿を語っている参加者たちの言葉を見て、これなら私でも参加できるかも知れない、と思った。ドキドキしながらキャンプに申し込んだあの日のことを、今も鮮明に覚えている。

初めてのキャンプは衝撃の連続だった。本当はいつも自信がないこと、そして人を信頼するのがずっと怖かったこと。自分の本音を他人に話したのも、人生で初めてのことであった。初めて出会った人たちにこんな話をするなんて、自分が一番信じられなかった。こんなこと、絶対に分かってもらえない。そう思って生きてきたのに、そこには優しく寄り添い、親身になって話を聞いてくれる仲間がいた。「アヤカの笑顔は周りを明るくするよね」そんなことを言われたのも初めてのことであった。

「そっと寄り添ってくれて私も救われたんだよ」そんなふうに言ってもらえて、涙が出るほど嬉しかった。自分にもいいところがあったんだ。本当に嬉しかった。

それから私はグッドと深く関わり始めた。いろんなキャンプに参加したし、事務所のフリースペースにもたくさん行った。関われば関わるほど、心から笑っている時間が増えていった。仲間と呼べる人たちがどんどん増えていき、みんなと力を合わせていろんなことに挑戦した。そんな環境が温かく、心地良かった。少しずつ自信もついて、いつしか、「私がしてもらったように、思いを持って人と関わりたい」そう思うようになっていた。初めの頃は泣き言を聞いてもらうばかりで、しかも、なかなか変わらない自分に苦しい思いもした。それでも私が踏ん張れたのは、どんな時も、自分に本音で向き合い続けてくれる温かい仲間がいたからだ。「私には無理だ」が口癖で、自分の事ばかり考えていた私が、いつの間にか「どうやったらみんなが楽しくなれるかな」なんて考えるようになっていた。我ながら、そんな自分にびっくりする。

私にとってグッドとは、自分が一番自分らしくいられる場所。大好きな人や場所がどんどん増えていき、あんなに嫌いだっただ自分の人生が、なんだか悪くないな、と思えてきている。大学3年生の今、進路や将来のことなど不安なことたくさんあるけれど、この場所で手に入れた自信を胸に、仲間たちの力を借りながら、これからも前を向いて進んでいきたい。



一步踏み出したいと思っている大学生にメッセージを!

- A. はじめは不安だけど、ちょっとだけ勇気を出すと世界が変わる! 大学生活、きっともっと楽しくなるはず。私もまだまだ模索中。
「迷ったらやってみる」がおすすめですよ!



共同生活寮 寮生インタビュー

コウダイ (22歳) 高校を辞めて、どこにも居場所がないと思っていた2年前。
通所&寮生活を経て、みごと就職！今は営業のお仕事を頑張っています。
20歳でグッドと出会ってから今日までの日々を振り返ってもらいました。



小学生の頃から明るくて元気なタイプ。好奇心旺盛で友達も多かった。中学ではサッカーに打ち込んで、副部長もしてた。勉強も好きで得意だったから、高校は地元の進学校を目指した。先生には厳しいと言われたけど、朝から晩まで必死に勉強してなんとか合格。でも、今思えば、そこで燃え尽きてしまったのかも…。高校の授業が始まると、想像以上の課題と勉強量で、すぐについていけなくなった。全然踏ん張れず、6月の中間テストはボロボロ。そこから学校に行けなくなった。心が折れて現実逃避。部屋で中毒のようにYouTubeを見続けた。家族ともうまくいかず、昼夜逆転。このままじゃダメだと思ったけど、どうにもならなかった。

高校を中退し、その後入った通信制高校でも、うまくいかなかった。学校にも家にも居場所がなくて孤独だった。自分の気持ちをどこにぶつけたらよいかわからない。卒業はできたけど、先のことは何も考えられなかった。これからどうやって生きていったらいいのか。後悔と不安がぐるぐると頭の中を巡って、苦しかった。



▲グッドと出会った頃

心配した両親が頼んだサポステの訪問支援を受けた。時々外には出ていたから、「自分はそこまでじゃない」と思っていたけど、実際は気持ちの浮き沈みが激しくて、ベットから何日も出られないこともあった。

「卒業から半年…。俺って引きこもりじゃん」ってハツとした。

「コウダイ君に合うんじゃない？」年明けから通っていたサポステの先生に紹介されて、グッドのことを知った。ホームページを見て、もっと元気で派手な人たちがいるのかなと思っていたけど、実際に行ってみると、すごく穏やかで優しい人ばかりだった。しっかり話を聞いてもらえて、初めてでも受け入れてもらえた感覚があった。

一番の転機は、ワークキャンプだった。グッドに通うようになって、しばらくしてからスタッフに誘われたけど、その頃も気持ちが沈んでいて、こんな自分が参加して本当に大丈夫かなって迷っていた。でも、勇気を振り絞って参加したキャンプは想像以上だった。みんなの話を聞いて、自分は一人じゃないんだって思えたことも、弱音を吐き出せたことも大きかった。学校に行けなくなってからずっと孤独を感じていたけど、話せる仲間ができて気持ちが軽くなった。キャンプをきっかけに、自分には無理だと思っていたスーパーでのアルバイトも始めることにした。

グッドの寮に入寮したのもその頃。みんなと一緒に朝起きて、ご飯を食べて、体を動かして。人と関わる感覚が戻ってきて、感情が動くようになった。自分でもどんどん変化していくのを実感した。相談するのも苦手だったけど、悩みを人に話しながら整理できるようになった。そして、まだまだ先だと思っていた就職活動に踏み出した。正直怖かったけど、みんなに背中を押されて「みんなが言うならやってみよう」と思えた。動き出すと大抵のことはどうにかなったし、しんどいことがあっても、グッドに戻れば、みんながいるっていう安心感があったから、就活も乗り越えることができたんだと思う。

スーツを着て初入社した日。「ここまで来れたんだ」って胸がジーンとした。20歳でグッドに出会えて本当によかった。スタッフさんに「一回グッドに遊びにおいでよ」って言われて、「えっ、あ、はい」って答えたあの時から、いろんなことがいい方向に動き始めた。あの一步を踏み出していなかったら、今も部屋に閉じこもっていたと思う。これからもきっと大変なことはあると思う。でも、一度めっちゃ転んで耐性ができているはずだから、今度はしっかり受け身がとれるはず。今、22歳。やっとスタートラインだ。10代は苦しいことばかりだったけど、これからの自分がちょっと楽しみ。これからも頑張っていきます！



▼スリランカにて

グッドでは、不登校やひきこもり状態の若者の支援をしています。

- 共同生活寮(宿泊型)
- ボランティア体験プログラム(通所型)



◎一人ひとりに合わせてプログラムを実施します。
←詳しくは、お問い合わせください！

good! News 2023

グッドは、ワークキャンプだけじゃない！
フリースペース、共同生活寮、イベントなど
さまざまな活動をしています。ここでは、
みんなにぜひ紹介したいニュースをお届けします！



ハロウィン仮装大会優勝
(フレディ・マーキュリー)

フリースペース

1,572人/年

グッドの事務所は**交流スペース**になっています。
2023年は延べ1,572人が来てくれました。9月にはモンゴル人16名、
11月には修学旅行中のインドネシア人の中高生15名も遊びにきて、
楽しく交流しました。日々、大学生を中心に乳児～大人まで幅広い世代、
いろんな人たちが一緒に食卓を囲んでいます。
興味がある方、お問い合わせの上、遊びにきてください！



いつも美味しいお土産や寄付を
ありがとうございます！

イベント盛りだくさん



マラソン大会、春&夏キャンプ報告
会、ハロウィン、スリランカナイト、
クリスマスパーティーを実施し
延べ315人が参加してくれました。
地域のお祭りにも参加し
焼きそば&かき氷の屋台が大盛況！



新しい仲間が増えました



共同生活寮にも新しい風が！
男子寮にユウスケとマサヒロ、女子寮にはアオイと
マナミがやってきました！
そして通いメンバーとして高校生のサネチカ、大学生
のカオルが加わり、一緒に運動したり、ご飯づくり
など様々な作業のお手伝いをしたりしています！

新スタッフ 仲山友(ゆう)です！

元ひきこもりで、立教大学**首席卒業**という
異色の経歴の持ち主。愛知県出身で、趣味は**料理と
カラオケ**。グッドとの出会いから9年。卒業後は



大手企業の**営業職**で限界までバリバリ
働いていたが、転職を機に人生を考え
直し、スタッフになると決めました！
広報、説明会、寮生のサポートにご飯
づくりまで、毎日びっくりするほど忙しいけど、
誰かの一步に繋がるといいな、
と思いながら日々働いています！

講演・広報活動も積極的に行っています！

代表 磯田は、神奈川大学の非常勤講師3年目。その他、立教、武蔵、東京外国語、
昭和女子、相模原女子、佛教、明星、中央、大東文化など、数多くの大学で、
スタッフがゲストスピーカーとして登壇し、活動紹介等を行っています。
◎ 講演や取材等のご依頼は、お気軽にお問い合わせください。



お問い合わせはこちら



ON AIR ラジオ番組 ゲスト出演

文化放送ラジオ「レコメン！」にて、若者の応援をする2つのコーナー
「井上咲楽の Cheer up! Radio」「大空幸星のレコメン！リアルボイス」に
磯田が10分ずつ、計5回出演。活動紹介をしたり、お悩み相談を受けたりしました。
大学生のアヤカも出演し、体験談を話してくれました。



1年に1度の…

グッドの日

祝！ キャンプ200回突破

11月4-5日に御殿場で、1泊2日の交流イベント「グッドの日」を開催。全国から105名のキャンパーが富士山の麓に集結しました。200回突破を記念して、有志のチームが合奏やダンス、マーチング、ヲタ芸などを準備し、会場を盛り上げました！



グッドキッズも大きくなったよ！

オープニングは、マーチングバンド&ダンス。

学校や仕事の合間を縫って練習を重ねた舞台は**圧巻！**

そして動画チームが制作した渾身の**200回記念動画**は、笑いあり涙ありで大感動。グッドが紡いできた歴史を感じることができました。夏キャンプ報告会で参加者たちがそれぞれのキャンプの魅力を伝えたりチームごとのグループワーク&発表でチームの絆を深めたりしました。



初グッドの日！すっごく楽しかった！

同じキャンプメンバーとの再会だけでなく、他の大学の学生や社会人など、普通に

大学生活を過ごしていたら**出会えない**

ような人たちと出会えたのが嬉しかった。夏にキャンプに参加して

本当によかった。他のキャンプにも行ってみたいくなった！（りこ／大学1年生）



社会人になって半年。夏キャンプの報告を見て、スリランカで見た風景とかあの頃の気持ちとか、セメント

まみれで大汗かいた感覚とか、いろいろ思い出して元気になった。あの時のことずっと忘れたくないなって思う。

（めい／社会人1年目）



ものすごく濃い2日間でした。動画や報告会を見ていて、ぐっとくる瞬間がたくさんありました。

日々、仕事や生活に追われ、余裕がない毎日の中で久しぶりにリフレッシュできました。またすぐにグッドに遊びにいきます！（なおや／社会人3年目）



グッド後援会 良会 よしのかい ぞ支援・ご協力ください！

月々 500円から！

グッドの活動を応援したい！

という方々からの寄付を募集しています。



郵便局・その他金融機関から

- 郵便局から
記号番号：00150-1-373990
- その他金融機関から
ゆうちょ銀行 当座：〇一九店 口座番号：373990
口座名：（トクヒ）グッド コウエンカイヨシノカイ
一〇 5,000円から



WEBから クレジットカードで

- 毎月少しずつ応援
月々500円から
- 単発で応援
1000円から



後援会特典！

ご支援いただいた方には、翌年に会報誌「ラック」を手書きメッセージ付きでお届けします！



高校生までは運動もできて頭もそこそこ。性格は明るく、親や先生に怒られることもないし、人間関係で悩むこともなかった。そして大学1年生の夏、グッドに出会って、世界が大きく広がるのと同時に、自分の中にある臆病さと覚悟のなさを思い知った。2年生の時、スリランカに行けなかった。ビビったのだ。猛烈に興味はあったのに、初海外、英語が苦手、未知の食事…と考えるうちに不安になって、あと一歩の勇気が出なかった。みんな「絶対行った方がいい！」ってあんなに背中を押してくれたのに…。結局卒業までコロナで海外には行けなかった。

それから4年の就活中「やっぱりここだ」と思って「グッドで働きたいです」って言い出したのに、親やゼミの先生に「NPOなんて」と猛反対されて不安になって「やっぱりやめます…」と言いに行った。親にも先生にも逆らったことがなかったのだ。「勇祐は、どこで誰とどう生きたいの？」コージ兄に聞かれた。胸がギュッと掴まれる感覚だった。苦しい、じゃなくて、少し心が楽になった自分に驚いた。人生のハンドルを自分でちゃんと握らなきゃって、生まれて初めて思った。誰かの人生が動き出すきっかけになるような仕事がしたい。そんな自分の思いに気が付いて、「誰に何と言われても、絶対にこの場所でやってみたい」そう思えた瞬間だった。

働き始めて、もうすぐ2年。グッドで過ごす日々は想像以上に大変で、毎日ドラマみたいいろんな事がある。挑戦の連続で、常に寝不足。筋が通っていないことはとことん突っ込まれるし、昔の自分だったらすぐにも逃げ出していた気がする。でも今はそうじゃない。

この場所には本当に魅力的な人がたくさんいて、毎日を全力で生きている。そんなみんなを見てると自分も負けてられないぞと思う。毎日本気だから、時には悔し涙も溢れるけれど、人や自分とこんなに本気で向き合える、そんな毎日がおもしろくて仕方ない。もう二度と、臆病とか、覚悟が決められないとかそんな所で立ち止まりたくない。自分がそうしてもらったように、誰かの背中を力強く押せる優しい男になりたい。今年はスタッフ3年目。目の前には追い付きたいカッコいい背中がたくさんある。まだまだ修行の毎日だけど、全部吸収して貪欲に突き進んでいきたい。 スタッフ 村松勇祐



資料請求はこちら



風音 ~編集後記にかえて~

〒173-0034 東京都板橋区幸町40-1
電話/FAX: 03-3973-1631 E-mail: info@good.or.jp
HP: http://www.good.or.jp/

#npogood @goodcamp

「スリランカのエイ人とかレー食べに行くけど、一緒に行く？」当時アルバイトをしていた団体の職員に誘われてよくわからぬまま、おもしろそうなので、ついて行くことにした。新宿の甲州街道沿いに店を構えるスリランカレストランに着くと、声の高い小さなおじいちゃんがニコニコ笑って待っていた。それが、サルボダヤ運動の創始者で、アジアのノーベル賞ともいわれるマグサイサイ賞受賞者の、アリヤラトネ氏だった。生まれて初めてのスリランカカレーを食べながら「君は何者だ」と問われた私は、元気のない日本の若者を連れて、アジアの国でワークキャンプをしたいという思いを、夢中になって熱く語った。アリさんはニコッと笑って、ひときわ高い声でこう言った。「カムカム、スリランカ！」

未知の国だったスリランカでのプログラムは、こうして始まることになった。とはいえ、当時のスリランカは1983年から26年間続いた内戦の真最中。現地での調整にも細心の注意を払い、チャーターしたバスの前後には警察車両がつく、物々しいスタートだった。それでも、穴だらけのガタガタ道を、バスに何時間も揺られて辿り着いた電気もガスも水道もない村は、拍子抜けする程のどかさで、村人たちが、手づくりの日の丸の旗を振って歓迎してくれた。ジャングルに囲まれた村での2週間のホームステイ生活。小鳥の歌で目を覚まし、井戸で顔を洗って一日が始まる。空は刻一刻と色を変え、何度見上げても見飽きることがない。リスや孔雀、1mを超えるオオトカゲもニコニコ歩いている。ワークの後は、美しい絵画のような夕焼けの湖で水浴びをする。見上げると、1.5mもあるオオコウモリの大群が、茜色の空を夜のえさ場へ悠々と飛んでいく。そして日が沈めば数えきれない星が空を埋め尽くし、木々の周りを大量のホタルが乱舞する。夢のような生活だった。一日に何度も飲む甘すぎる紅茶も、薪のかまどで母さんが作る手料理も、本当においしくて飽きることがない。電気がないので、日が沈むと寝るしかない原始のような自然な暮らしはなぜか心地よく、都会で乱れた私たちの身体をやさしく癒してくれた。村を出る数日前から、家族は「寂しい」「帰らないで」と涙を流し、出発当日は、参加者も村人も声を上げて泣きながら別れを惜しんだ。

あの始まりのスリランカから22年。29回のキャンプを実施し、700名近い若者を引率した。内戦激化で行けなかった時期もあったし、現地の協力団体も何度か変わった。サルボダヤとのつながりが切れ、もうこの国に来ることはないか、と考えた時期もあったが、数年後、ラオスの小さな町で出会った僧侶が縁で、復活を果たした。振り返れば、そのどの出会いも奇跡的なものばかりだった。私がスリランカで記念切手にしてもらえる日がくるなんて、それこそ奇跡みたいな話ではないか。昨年、コロナで止まっていたプログラムが4年ぶりに再開した。訪れた新しい村の人たちも、あの初めての村と同じように、心から私たちを歓迎してくれた。長年受け入れをしてきてくれた団体もコロナの影響で縮小し、10年以上協働してきた現地スタッフたちも老いからは逃れられない。いつまであの国と関わり続けられるのか。財政破綻し、政治的、経済的にも課題が山積みのあの国の明るい未来を、祈らずにはられない。 コージ